

カムチャツカで観察したスミレ属植物 < 続編 >

# カムチャツカで観察した植物 (2015)

文・写真 山岸 洋貴

2015年、再びカムチャツカを訪問する機会を得た。しかも今年にはアジア太平洋地理学研究所カムチャツカ支部の Chernyagina Olga 博士 (以後オリガさん) も調査にご同行して下さるということだ。それはとても幸運なことである。なぜならオリガさんはカムチャツカの植物相に精通している研究者で 2004 年に出版された Catalog of flora of Kamchatka の著者の一人であるからだ。また昨年同様ロシア事情や植物にも詳しく、私をカムチャツカへ導いてくださった福田さん、いつの間にか植物も詳しくなっていた友人の藤原さん、そして新たに加わった石川先生が今年の旅路を共にするメンバーである。昨年は 6 月初旬から中旬、ペトロパブロフスク - カムチャツキー市内でもちょうどタニマスマミレ (*Viola epipsiloides* A. et D. Löve) やアイヌタチツボスマミレ (*V. sacchaliniensis* Boissieu) が美しく開花していた頃で、ミヤマスマミレ (*V. selkirkii* Pursh ex Goldie)、キバナノコマノツメ (*V. biflora* L.)、オオバタチツボスマミレ (*V. kamtschadalarum* W. Beck. et Hult.) にも出会う事ができた。詳しくは拙筆「カムチャツカで観察したスミレ属植物 (<http://reevesiana.web.fc2.com/yamagishi2014.pdf>)」をご覧ください。今年、昨年よりも 1 ヶ月ほど遅く 7 月中旬、またエツソ (Эццо) 周辺 (北緯 56 度付近、標高約 500m~900 m) やアヴァチンスキーベースキャンプ周辺 (北緯 53 度付近、標高約 800m) など前回と異なる時季や環境へ行く為、まだカムチャツカでは出会っていないスミレ属植物、様々な植物達との出会いが待っていると期待された。

今回は日本からの直行便でカムチャツカに向う事ができる。ヤクーツク航空が運航している夏季限定の直通チャーター便があり、関西空港もしくは成田空港発着となる。普段であればウラジオストクなど経由でどこかで一泊しなければならない。関空からはおよそ 4 時間半のフライトでカムチャツカに到着する。それを考えると非常にスムーズな旅だ。関空を飛び立った飛行機は晴天の中、私の現在の居地である弘前市を上空通過し、故郷である北海道を縦断して、オホーツク海へと抜けていった。再び訪れる事ができるカムチャツカの大地へと逸る気持ちが飛行機の中で一層高まった。空港に着くとオリガさんと運転手役のセルゲイさんが出迎えてくださった。さあ、いよいよカムチャツカ調査の始まりだ。

到着翌日、まずはエツソへ向う。ここはペトロパブロフスク - カムチャツキーから実に約 530km も離れたカムチャツカ半島の中部に位置する。エツソまでの行程の大半は、カムチャツカ半島を南北に貫くスレージンヌイ山脈 (中山脈) に沿って半島中央部に行く道を北上する。途中カムチャツカ川の源となる分水嶺を越えるとカムチャツカ川が削り取った平地を進むことになる。大半は砂利道で運転手役のセルゲイさんが元々は富山



Fig. 1 カムチャツカ半島の地図  
ミリコヴォが位置する中央の盆地にカムチャツカ川が流れる。人口の大半はペトロパブロフスクカムチャツキーにある。



Fig. 2 ガナリ周辺のハイマツ生育地  
このような風景がこの辺りは続いていた。



Fig. 3 エゾノチチコグサ (*Antennaria dioica* (L.) Gaertn)  
まとまってあちらこちらで観察できた。

県内で走行していたと思われる中古グランドハイエースを運転し、爆走する。途中、ガナリ (Ганалы) から少し北へ進んだ標高 340m 付近で道路脇にハイマツ (*Pinus pumila* (Pall.) Regel) が生育する起伏にとんだ場所に停車し、辺りを散策した。写真 (Fig. 2) のようにハイマツの他、ヒメイソツツジ (*Ledum palustre* L. subsp. *decumbens* (Ait.) Hult.)、イワツツジ (*Vaccinium praestans* Lamb.) などが優占し、地衣類などが地面を被伏していた。その他、背の低いダケカンバ (*Betula ermanii* Cham.) やヤナギ類がまばらに生育し、草本類はワレモコウ (*Sanguisorba officinalis* L.)、チシマフウロ (*Geranium erianthum* DC.)、エゾノシシウド (*Angelica gmelinii* (DC.) M. Pimen.)、エゾイチヤクソウ (*Pyrola minor* L.)、エゾノチチコグサ (*Antennaria dioica* (L.) Gaertn)、数種のイネ科とカヤツリグサ科植物などがちょうど開花期を迎えていた。

ここでこの旅路最初のスミレ属植物との出会いがあった。深紫のスミレ属植物オオバタチツボスミレ (Fig. 4) である。このような環境で出会えるとは思わなかったので少し面を食らった。北日本の湿地などで観察されるような大きな株ではなく、どちらかというとな北海道東部の湿性林で見かけるようなやや小型の個体だった。



Fig. 4 ガナリ周辺で観察されたオオバタチツボスミレ (*V. kamtschadalarum* W. Beck. et Hult.)  
開花個体は数株しか観察できなかった。

その後、本日の行程のほぼ中間地点にあるミリコヴォ (Мильково) で昼食をとり、更に北上を続ける。エツソは中山脈の内側にあるため、北緯 56 度付近でこれまで北上していた道を離れ西に分岐した道を行くことになる。分岐点を西に曲がらず少し北上するとカムチャツカ川に架かる橋があり、カムチャツカ半島最高峰クリュチェフスカヤ山 (標高 4750m) を望めるというのでそこに立ち寄って頂いた。残念ながらこの日は遥かにかすんだクリュチェフスカヤ山が一瞬見えるだけだった。しかし、周辺にある湿地では広々とした湖面に黄色く鮮やかなオオタヌキモ (*Utricularia macrorhiza* Le Conte) の花が印象的な景色を見ることができた (Fig. 5)。またそこでは“これが日本では絶滅したといわれるカラクサキンポウゲ (*Ranunculus gmelinii* DC.) か!!”とぬか喜びした日本には分布していないキンポウゲ属植物 (*R. hyperboreus* Rottb.; Fig. 6) にも出会えた (ちなみにカムチャツカではカラクサキンポウゲが自生しているが今回の調査では出会えなかった)。

大移動の末、エツソにつくと風光明媚な街並みが広がっていた。小さな街ではあるが観光に力を入れている街であることが伺われた。この街は、カムチャツカの先住民族エヴェン人の居住区とし



Fig. 5 カムチャツカ川周辺の湿地  
手前の黄色い花はオオタヌキモ  
(*Utricularia macrorhiza* Le Conte) の花。

でも有名であり、最近ではロシア国内外からも観光客が訪れるらしい。小さな売店もあるし、屋外温泉プールもある。宿は研究所が保有している施設で快適な木造2階建ての家であった。エッソではここが我々のベースとなる。

翌日から丸2日間、周辺の山々を歩き調査を行った。遠くはるばるエッソまで来たのは、私が行っているキケマン属植物に関する調査のためである。エッソ周辺に生育しているというユーラシア大陸と北アメリカ大陸の両方に広く分布する種 *Corydalis arctica* M. Pop. という植物の生態と系統に関して私は興味があるのだ。まずは現地で詳細な分布情報を得るためにビジターセンターに向った。ここには植物学者が駐在していて植物相の調査をしている。残念ながらその方は不在であったが、集めた標本を見せて頂いた。なかなかのコレクションで様々な分類群の腊葉標本が保管してあった。もちろん、*C. arctica* の標本もあり、初対面した。これまでロシアのいくつかの研究関連施設を訪ねたことがあるが、どこも標本を基礎資料として大事にしている印象がある。ロシアの自然史研究の歴史の深さを感じた。

ティータイムの後、エッソの南側にあるブイストラヤ川を越えたコジレフスキー山地の山を散策した。まずはスキー場の斜面を登り更に南側へ向かう登山道に行く。スキー場周辺の森林は大規模な山火事の跡地が目立った。エッソの平均年間降水量は400mm程度しかなく、ほとんどが人為的な失火による山火事だそうだ。



Fig. 6 *Ranunculus hyperboreus* Rottb.  
葉は小さく、深く切れ込んだ手のひら状の形をしているのが特徴。



Fig. 7 エッソの街中にあるビジターセンター  
日本語が書かれた看板があるが、残念ながら日本語ができるスタッフはいない。ただ英語ができるスタッフがいる。



Fig. 8 南側にあるスキー場から見たエッソの町並み  
左右の岩塊が露出した場所などは過去の山火事の跡だという。

ちなみにある報告書によるとカムチャツカ半島だけでも多い年では年間 8 万 ha もの森林が山火事で失われているとのこと。日本の白神山地世界自然遺産地域が約 16 万 ha なので、単純な計算によると僅か 2 年間で全焼という途方もなく広大な面積になる。

途中ブイストリンスキー自然公園と書かれた看板とたぶん立ち入る際の注意事項が書かれた看板があった（ロシア語の為詳しくは私にはわからず。唯一の英語の部分には World natural heritage の文字が書かれていた）。標高の低いところでは日本ではまずお目にかかれない背の高いハイマツ（Fig. 9）が、カラマツの一種（*Larix cajanderi* Mayr）、ダケカンバ、ヒメカンバ（*Betula exilis* Sukacz.）、タカネナナカマド（*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schlecht.) M. Roem.）などと生育し、標高が高くなるに従って馴染みのハイマツ（這う松）の樹形へと変化していった。林床の低木はヒメイソツツジが優占する場所が多く、エゾノマルバシモツケ（*Spiraea beauverdiana* Schneid.）、クロミノウゲイスカグラ（*Lonicera caerulea* L.）、チシマヒョウタンボク（*Lonicera chamissoi* Bunge ex P. Kir.）などの低木、草本ではマイヅルソウ（*Maianthemum dilatatum* (Wood.) Nels. et Macbr.）やツマトリソウ（亜種）（*Trientalis europaea* L. subsp. *arctica* Hult.）などが開花していた。また標高 650m 付近の開けた草地（Fig. 10）には、バイケイソウ（*Veratrum oxysepalum* Turcz.）、クロユリ（*Fritillaria*



Fig. 9 直立するハイマツ（*Pinus pumila* (Pall.) Regel）  
カラマツやダケカンバと混じって森林を形成する場合、このように直立する形状になる。



Fig. 10 標高 650m 付近の草地  
クロユリ（*Fritillaria camschatcensis* (L.) Ker Gawl.）が美しく開花していた。



Fig. 11 標高 750m 付近の登山道周辺部の様子 (左) と *Corydalis arctica* M. Pop. (右)  
 地衣類やミズゴケ類に覆われている岩塊の周りにヒメイツツジやエゾノマルバシモツケをはじめとする多くの高山植物が  
 開花していた中に *C.arctica* がちらほらと開花していた。



Fig. 12 タニマスミレ (*Viola epipsiloides* A. et D. Löve)



Fig. 13 キバナノコマノツメ (*V. biflora* L.)

*camschatcensis* (L.) Ker Gawl.)、クロバナハンショウヅル (*Clematis fusca* Turcz.)、オオハナウド (*Heracleum lanatum* Michx.)、シコタンキンポウゲ (*Ranunculus subcorymbosus* Kom.)、ヨモギギク (*Tanacetum vulgare* L.) などが開花しており、また日本ではごく限られた場所ではしか観察する事の出来ないフサスギナ (*Equisetum sylvaticum* L.) が至る所に生えている光景は印象的だった。

標高 700m 以上の小川沿いを行く登山道の周辺部は、ハイマツが覆う中、岩塊が地衣類やミズゴケ類に覆われている場所 (Fig. 11 左) が多く、様々な高山植物が観察された (別途末尾に開花植物リストを記す)。探し求めていた *Corydalis arctica* (Fig. 11 右) もミズゴケの中に生育しており、ちょうど開花期を迎えていた。2015 年は大雪だったことや春の低温などから通常よりも遅い季節の開花となったと考えられる。花はあきらめていたのでとてもラッキーだった。*C. arctica* についてはまた別の機会に詳しく触れたいと思う。様々な高山植物が咲いていた中、観察されたスミレ属植物は昨年も多く環境で観察されたタニマスミレ (Fig. 12) とアパチャ近郊の砂礫地で観察したキバナノコマノツメ (Fig. 13) だった。キバナノコマノツメは岩の上に生えているものは背が低いものが多かった。タカネスミレ (*V. crassa* Makino) にも似ていたが、タカネスミレほどの葉の光沢はなく、表面に微毛があった。登山道沿いにはタニマスミレの個体数が多く、標高 700 m ~800m 付近の登山道沿いの至る所で観察できた。さらに標高を上げていく。途中カムチャツカケアシノスリ (*Buteo lagopus*



Fig. 14 空を舞うカムチャツカケアシノスリ (*Buteo lagopus kamtschatkensis*)  
エッソ周辺ではあちらこちらで出会った。



Fig. 15 リシリビャクシン (*Juniperus sibirica* Burgsd.)  
日本では北海道のみに分布する。調査したルートではやや開けた場所に点在していた。



Fig. 16 ブイストラヤ川  
川岸には大きなドロノキが生育している場所があり、牛が放牧されていた。



Fig. 17 フキの一種 (*Petasites frigidus* (L.) Fries)  
おなじみの丸い葉ではなく二等辺三角形をしている。中央のフキノトウが綿毛をつけている。

*kamtschatkensis*; Fig. 14) などを横目にしながら進むが、標高 800m 付近まで登ったところで普段の行いが悪い私？私達？に雨が降り注ぐ。もう少し標高を上げると恐らく雪田風景などが広がっただろうが、まだ沢地形の中でその全貌を見ることはできなかった。さほどの雨ではなかったのだが本来の目的を達したのと今後の行程を考えて撤退となった。下山途中、リシリビャクシン (*Juniperus sibirica* Burgsd.; Fig. 15)、かつて調査に関わったことのあるオニク (*Boschniakia rossica* (Cham. et Schlecht.) B. Feditsch.) の枯れた姿、ウサギシダ (*Gymnocarpium dryopteris* (L.) Newm.) などが目にとまった。

下山後、運転手のセルゲイさんが麓まで迎えに来るはずが・・・泥まみれの私達を愛車に乗せるのが嫌だということで迎えに来ず (実は既に一杯やっていたらしく迎えに来られなかったという事だった (笑))。それほど遠くではないが歩いて宿まで帰る事となった。しかし、帰り道で日本ではほとんど見られないだろう美しい自然河川の様子 (Fig. 16) やいろいろな植物 (リュウキンカの一種 *Caltha palustris* L.、ツリフネカラマツ *Thalictrum sparsiflorum* Yurcz. ex Fisch. et Mey.、フキの一種 *Petasites frigidus* (L.) Fries; Fig. 17) などを観察できたので、結果オーライだったのだが。

エッソ滞在 2 日目、まずは昨日訪れたスキー場へ向かった。改めてスキー場の周辺を散策すると辺り一面のフサスギナの中に様々な植物に出会えた (Fig. 18)。スキー場の荒地では、随分華奢な印象を受けたエゾノレンリソウ (*Lathyrus pilosus* Cham.)、ホソバツメクサの基本種ヤマハルユキソウ (*Minuartia verna* (L.) Hiern.;



Fig. 18 あたり一面のフサスギナ (*Equisetum sylvaticum* L.)



Fig. 19 ホソバツメクサの基本種ヤマハルユキソウ (*Minuartia verna* (L.) Hiern.)

Fig. 19)、タカネスイバ (*Acetosa lapponica* (Hitt.) Holub)、ヤナギラン (*Chamerion angustifolium* (L.) Holub)、エゾノキヌタソウ (*Galium boreale* L.)、ムカシヨモギ属の *Erigeron kamtschaticus* DC.、シオン属植物 (*Aster sibiricus* L.) の他、ハイマツの中に、エゾイチゴ (*Rubus idaeus* L. subsp. *melanolasius* Focke.)、ヒメイソツツジ、ベニバナイチヤクソウ (*Pyrola incarnata* (DC.) Freyn)、日本で観察するよりも若干花冠が長く感じたクロマメノキ (*Vaccinium uliginosum* L.)、コケモモ (*V. vitis-idaea* L.)、リンネソウ (*Linnaea borealis* L.) などが観察された。またスキー場脇の急な斜面では、ハイマツが疎になり、ゴロゴロとした岩塊で構成された斜面となっている場所がところどころあった。このような場所では地衣類やコケ類に覆われた岩が目立ち、直立し株になったニオイシダ (*Dryopteris fragrans* (L.) Schott ; Fig. 20) が所々に生えていた。この他、エゾノマルバシモツケ、ヒメイソツツジ、クロマメノキが生え、ふわふわとしたコケ類の上にはツルコケモモ (*V. oxycoccos* L.) が花を咲かせていた。



Fig. 20 スキー場脇のニオイシダ (*Dryopteris fragrans* (L.) Schott)

昼食をとり、今度はエツソの西側にある山塊へ向かう。エツソの端にある民家を越えてしばらく歩くとあたり一面、山火事後に再生したと思われる若いダケカンバの林が続いた (Fig. 21)。林床は枯死したハイマツが大量に広がっていた。まるで大きな動物の白骨化した屍が無数に横たわっているようだった。その中に若いハ



(左) Fig. 21 エツソ北西にある山火事跡  
(上) Fig. 22 クロミノウグイスカグラ (*Lonicera caerulea* L.) の果実。いわゆるハスカップのこと。



Fig. 23 V字の谷での調査風景  
右側の斜面に山火事の痕跡が残る。



Fig. 24 ハシナガホシガラス (*Nucifraga caryocatactes macrorhynchos*)

イマツ、ヒメイソツツジ、クロマメノキ、ちょうど食べ頃の果実をつけていたクロミノウグイスカグラ (Fig. 22) などがまばらに生えていた。このような光景が続く中、なだらかな斜面を1時間ほど歩くと東西方向に伸びる深い谷底を流れる小川にたどり着いた。急峻の南側斜面にも山火事の跡が目立ち、岩塊がほぼむき出しの斜面にハイマツの枯死木、若いハイマツ、ヒメイソツツジ、谷底は比較的若いフルティコーサハンノキ (*Alnus fruticosa* Pall.)、ダケカンバ、タカネナナカマド (*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schlecht.) M. Roem.) の林になっていた (Fig. 23)。途中、昨日見たカムチャツカケアシノスリやハシナガホシガラス (*Nucifraga caryocatactes macrorhynchos* ; Fig. 24) などが空を舞っていた。標高730m付近の小川周辺部には、前日観察したタニマスミレとキバナノコマノツメの他、調査対象の *Corydalis arctica*、イネ科の一種 (ミヤマノガリヤス *Agrostis flaccida* Hack. ?)、バイケイソウ (*Veratrum oxysepalum* Turcz.)、ジンヨウスイバ (*Oxyria digyna* (L.) Hill)、シベリアイワブキ (*Saxifraga nelsoniana* D. Don もしくは *Micranthes nelsoniana* (D. Don) Small)、ヤマブキシヨウマ (*Aruncus dioicus* (Walter) Fernald)、エゾノマルバシモツケ、ツマトリソウ (亜種) (Fig. 25a) などが観察された。さらに谷の奥へと進んでいくと谷は南北の斜面が迫りV字状になっていく。両斜面の岩場やその周辺には、同じくタニマスミレ、キバナノコマノツメの他、ミヤマイ (*Juncus beringensis* Buchenau)、バイケイソウ、チシマアマナ (*Lloydia serotina* (L.) Reichenb.)、ムカゴトラノオ (*Bistorta vivipara* (L.) S. F. Gray)、エゾミヤマハンショウヅル、ハクサンイチゲの別亜種 (*Anemone narcissiflora* L. subsp. *sibirica* (L.) Hult. ?)、チシマクモマゲサ (*Saxifraga merkii* Fisch. ex Sternb. もしくは *Micranthes merkii* (Fisch. ex Sternb.) Elven et D.F. Murray)、シベリアイワブキ (Fig. 25b)、キンロバイ (*Potentilla fruticosa* L.)、チシマイチゴ (*Rubus arcticus* L.)、オヤマノエンドウ属植物の1種 (*Oxytropis* sp.)、チシマフウロ (*Geranium erianthum* DC.)、イワヒゲ (*Cassiope lycopodioides* (Pall.) D. Don)、ヒメイソツツジ、エゾコザクラ、シオガマギク属植物 (Fig. 25c)、タマザキシオガマ (*Pedicularis capitata* Adams; Fig. 25d)、シュムシュクワガタ (*Veronica grandiflora* Dicks. Fig. 25e)、エゾノキヌタソウ (*Galium boreale* L.)、カノコソウ属植物 (*Valeriana capitata* Pall. ex Link.)、タンポポ属植物、数種のカヤツリグサ科植物などが開花していた。砂礫状の地面で観察されたキバナノコマノツメ (Fig. 26 左) は、昨日観察したものよりも更にタカネスミレ (広義) (*V. crassa* Makino) に似ており、亜種ヤツガタケキスミレ (*V. crassa* ssp. *borealis* var. *yatsugatakekeana* Hid. Takah.) のように有毛で光沢がなくやや厚い葉をしていた。オリガさんはタカネスミレではないかと話していたが、私は葉の様子や周りの個体を考慮するとキバナノコマノツメではないかと感じた (千島列島から中間的な特徴を示すとするオオタカネスミレ (*V. biflora* L. var. *vegeta* (Nakai) Hid. Takah.) が報告されている。高橋英樹先生著「千島列島の植物」によるとタカネスミレよりも大型で地上茎は立ち上がり20cm以上とのこと。詳しく調べる必要があるが、観察した種とは異なると思われる。





Fig. 25 エツソ北西部周辺で観察された植物

a ツマトリソウ (亜種) (*Trientalis europaea* L. subsp. *arctica* Hult.), b シベリアイワブキ (*Saxifraga nelsoniana* D. Don, c シオガマギク属植物の一種, d タマザキシオガマ (*Pedicularis capitata* Adams), e シムシクワガタ (*Veronica grandiflora* Dicks), f ヒオウギアヤメ (*Iris setosa* Pall. ex Link)



Fig. 26 エツソ西北部で観察されたキバナノコマノツメ (*V. biflora* L.)

(左) タカネスミレとよく似たキバナノコマノツメ、(右) クリーム色の花弁を持つ個体



Fig. 27 エッソ北西部の標高 1000m 付近の様子

る)。また標高 800 m 付近の谷底部の湿った所には、クリーム色の花弁を持ったキバナノコマノツメを観察した (Fig. 26 右)。私は初めて出会ったのだが、このような変異はごくまれに生じるようである。標高 830 m 付近で急な南側岩塊斜面を 100 m 程登る。途中、カムチャツカで唯一自生しているアヤメ属のヒオウギアヤメ (*Iris setosa* Pall. ex Link; Fig. 25f)、バッコヤナギ (*Salix caprea* L.)、オンタデ属植物 (*Aconogonon tripterocarpum* (A. Gray) Hara)、クロマメノキ、トウヒレン属植物 (*Saussurea pseudo-tilesii* Lipsch.) などを観察しながら斜面を登りきった。

斜面の上はどこまでも見渡すことができる平坦な台地があった (Fig. 27)。・・・しばし言葉を失った。残念ながら国語は平均点以下、文章力の無い私にはこの風景を形容する言葉が見つからない。せいぜいありきたりな“言葉を失う”という表現しか使えないのが悔しい。おそらくかつてこの地を覆っていた氷河が削り取った跡なのだろう。どこまでもどこまでも続く平原はととてもとても素晴らしかった。ただ、やはりここも枯死木が多く、かつて業火に見舞われたであろうことは間違いない。

台地の上を散策すると、植生が他とは明らかに異なり、実に様々な植物が咲いているお花畑に出くわした (Fig. 28)。ハイマツ、ヤナギ属植物 (*Salix sphenophylla* A. Skvorts.)、ヒメカンバ、ガンコウランの基本種 (*Empetrum nigrum* L.)、クロマメノキ、ヒメイソツツジなどの低木がマット状に広がり、ミヤマヌカボ (*Agrostis geminata* Trin.)、ミヤマノガリヤス、ヤナギ属植物 (*Salix sphenophylla* A. Skvorts.)、イブキトラノオに近縁だと思われる (*Bistorta plumosa* (Small.) D. Löve もしくは *Persicaria bistorta* (L.) Samp.)、シベリアイワブキ、日本には分布せず周北極圏に生育する黄色いシオガマ (*Pedicularis eriophora* Turcz; Fig. 29a)、カラフトゲンゲ (*Hedysarum hedysaroides* (L.) Schinz. et Thell.; Fig. 29b)、前日観察したフキの一種 (*Petasites sibiricus* (J. F. Gmel.) Dingwall)、が観察された。このお花畑を源頭に先ほどまで歩いていた谷の方へ緩やかな傾斜があり、やや窪んだ谷状の地形には大雪山で見かけるような雪田跡があった。ここにはキバナシャクナゲ (*Rhododendron*



Fig. 28 エッソ北西部の標高 1000m 付近のお花畑



Fig. 30 トリカブト属植物 (*Aconitum delphinifolium* DC.)



Fig. 29 エッソ北西部の標高 900 ~ 1000m 付近に咲く植物達  
 a *Pedicularis eriophora* Turcz, b カラフトゲンゲ (*Hedysarum hedysaroides* (L.) Schinz. et Thell.), c ゲンジソウ (*Parrya nudicaulis* (L.) Regel), d ミネズオウ (*Loiseleuria procumbens* (L.) Desv.)

*aureum* Georgi) が咲き、タニマスミレの他、バイケイソウ、ゲンジソウ (*Parrya nudicaulis* (L.) Regel; Fig. 29c)、ヤマブキショウマ、チシマイチゴ、エゾイチゴ、オヤマノエンドウ属植物の一種、ミネズオウ (*Loiseleuria procumbens* (L.) Desv.; Fig. 29d)、エゾノツガザクラ、エゾコザクラ、チシマヒョウタンボク、エゾノチチコグサ、ヨモギギクなどが開花していた。またヒエンソウ (デルフィニウム) に葉がよく似ているトリカブト属植物 (*Aconitum delphinifolium* DC.; Fig. 30) が一株だけ花を咲かせていた (花をよく確認せずにデルフィニウム

かと勘違いしたところオリガさんから笑われてしまった。しかし、学名の種小名“デルフィニウムの葉”が示す通り良く似ている)。そのまま、この斜面を下っていくと先ほどまで歩いていた谷底に戻り、そのまま街を目指して帰路に着く。途中、町はずれの温泉がある草原を通った時には既に薄暗くなっていた。草原にはオオハナウドがきれいに咲き、道端ではゲンバイナズナ (*Thlaspi arvense* L.) や、チシマオドリコソウ (*Galeopsis bifida* Boenn) などを観察した。こうして2日間のエッソ調査では本来の目的も果たせ、無事に終了した。

エッソでの調査終了した翌日、ペトロパブロフスクへの移動で一日を費やした。帰り道にいくつか立ち寄って頂いた1つのペトロパブロフスクまであと125 km程という位置にあるマルキ温泉周辺では、オホーツクテンツキ (*Fimbristylis ochotensis* (Meinsh.) Kom.)、タチヒメクグ (*Kyllinga kamtschatica* Meish.) オオチシマアカバナ (*Epilobium glandulosum* Lehm.)、タチコゴメグサ (*Euphrasia maximowiczii* Wettst.) など、いろいろな植物を観察した。大変面白かったのだが本稿では書ききれないのでそこは割愛させて頂く。翌日はカムチャツカで最も日本人ツアー客が訪れているであろうアヴァチャ山、コリャーク山の山麓へ向う予定だ (Fig. 31)。この



Fig. 31 コリャーク山、通称ラクダ山、アヴァチャ山を望む  
左端にあるとがった山がコリャーク山 (標高 3456 m)、中央の3つのピークのうち左手の山がラクダ山、右端がアヴァチャ山 (標高 2741m)。3枚の写真をつなぎ合わせて制作。



Fig. 32 セルゲイさんの愛車 UAZ-452 ロシア製  
日本でも 350 万円ほどで購入できるとか



Fig. 33 人馴れしたホッキョクジリス (*Spermophilus parryii*)  
私に負けずメタボリック? (笑)

場所はナルィチェヴォ自然公園に位置する。この自然公園とエッソが含まれるブイストリンスキー自然公園、その他の自然保護区や自然公園とあわせて6つがカムチャツカの火山群という世界自然遺産に登録されている。さてこれまで観察できなかったタカネタチツボスミレ (*Viola langsdorfii* Fisch. ex Ging.) は観察できるだろうか。3日ぶりのペトロパブロフスクのホテルでこれまでの写真や資料などを見返し、採集した標本などに囲まれながら更に気持ちが高ぶっていった。

よい天気となった朝、運転手のセルゲイさんが自慢のグランドハイエース (実は昨日、爆走中に部品がとれるハプニングがあった) ではなく、ロシア製の武骨な車で登場した。・・・昨日の故障のせいだろうか・・・正直、少し心配した。ちなみにそのロシア製の車は通称 UAZ (ワズ) というワゴンタイプの車だ (UAZ とはウリヤノフスク自動車工場のこと。UAZ-452 というのが車の名前らしい)。非常にかっこいい。市内で買い物を済ませたのち、空港があるエリゾヴォ (Елизово) の北東にあるベースキャンプへ向かう山道をいく。この山道は火山の火砕流などが流れた跡を利用して作られていると思われ、枯れた大きな沢状になっていた。しばらく進むとこれまで進んでいた沢は大きな雪渓へと変化した・・・まさかこの雪の中を?・・・少し勢いをつけて進んでいった。この時、この車で私達を迎えに来た理由がはっきりとわかった。この道をハイエースで